霜月

〔しもつき〕令和３年 11月

秋も過ぎ去り、冷え込みもきびしくなって、霜が降りるという意味があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

志を立つることは、大にして高くすべし
小にして、低ければ、小成に安んじて
成就しがたし

～ 貝原益軒・五常訓 ～

今月のことば

志を立つることは、大にして高くすべし
小にして、低ければ、小成に安んじて
成就しがたし

―― 貝原益軒・五常訓 ――

青年よ大志を抱けと説いたクラークの言にも似たものがある。初めから低い、小さい理想を抱いていたのでは大人になれない。大志を抱いても、成就することは難しいかもしれぬ。然し小志を抱いていたのでは、それが実現しても小さい志しか達成されない。

低い所に理想を置くのではなく、一つづつ昂めていく努力を怠らないこと。その努力がこれを速成せしめよう。倦まず、たゆまない努力をつづけていけば、必ず手にすることが出来る。これを手にするとは、身体にそれだけの実力がついた証拠である。他人に出来るなら自分にも出来ぬことはないという理想に燃えることである。仕事でも学問でも同じことである。大志は抱くことがよい、それが実現するか、しないかは、その人の努力如何にかかる。「大志と努力」この二つは離れることは出来ない。

（続神道百言　一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

鞴祭

十一月八日
火を扱う人々の祭り
「ふいご祭り」

鍛冶職、鋳物師などを始め、火を用いる職業の人々が行う祭りで、たたら祭り、金山講ともよんでいます。ふいご祭りの名は、火を起こす道具の鞴から出たもので、この日は仕事を休んで注連縄を張り、赤飯や餅を供えて金山毘古神・金山毘売神等を祀ります。江戸年中行事の記録には「十一月八日のいなり、ふいご祭りに、鍛冶屋でみかんを投げる」とあり、稲荷神社の火焚祭の行事と結びついて受け継がれています。

新嘗

十一月二十三日
新穀を供えて
収穫に感謝「新嘗祭」

新穀を神々に供え神恩に感謝する祭りで、宮中では天皇陛下が新穀を天神地祇に献って、御自らも召上りになります。

古くは日が定まっておらず、十一月の第二の卯の日を撰んで祭が行われましたが、明治六年の新暦採用の年の第二の卯の日がちょうど十一月二十三日だったことから、以後は十一月二十三日に行われることになったようです。

「酉の市」熊手が売られるようになった理由

毎年十一月の酉の日、全国各地の大鳥神社・鷲神社等で行われるお祭で、初酉を一の酉といって一番重視し、順に二の酉、三の酉といい、三の酉がある年は火事が多いという言い伝えがあります。これはひと月に三回も祭礼が立つということで、日常生活がゆるまないよう、気を引き締める意味合いがあったと思われます。

鷲神社はもともと武運長久の神として、武士の信仰を集めていましたが、江戸時代になって祭礼の市で農機具を並べたところ、「福をかき集める」「金銀をかき集める」縁起物として、とくに熊手が人気品となりました。

さらに、お多福面、入船などの縁起物や、黄金餅という粟餅、ゆでたヤツガシラ（サトイモの一種で、「八人の頭になれる」という縁起物）なども酉の市で売られるようになり、武運長久の神としてより、商売繁盛や開運の神として、広く信仰されるようになっていきました。

志操堅固

物事をしようという意志が固いこと。環境などに左右されず、志を守って変えないこと。

参考文献
『日本人のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）

令和３年
２０２１年

１１月

日	月	火	水	木	金	土
	1 大安 うし	2 赤口 とら	3 先勝 ● 文化の日 明治祭 う	4 友引 たつ	5 仏滅 み	6 大安 三りんぼう うま
7 赤口 立冬 ひつじ	8 先勝 ふいご祭 さる	9 友引 とり	10 先負 いぬ	11 仏滅 三りんぼう る	12 大安 ね	13 赤口 うし
14 先勝 とら	15 友引 七五三 う	16 先負 たつ	17 仏滅 み	18 大安 うま	19 赤口 ひつじ	20 先勝 さる
21 友引 とり	22 先負 小雪 いぬ	23 仏滅 ● 勤労感謝の日 新嘗祭 三りんぼう る	24 大安 ね	25 赤口 うし	26 先勝 とら	27 友引 う
28 先負 たつ	29 仏滅 み	30 大安 うま				

二十四節気

【立冬　りっとう】…七日

旧暦十月亥の月の正節で、これから冬に入る初めの節で、このころは陽の光も一段と弱く、日脚も目立って短くなり、冬の気配がうかがえるようになります。

【小雪　しょうせつ】…二十二日

旧暦十月亥の月の中気で、まだ市街には本格的な降雪はないものの、遠い山嶺の頂には白銀の雪が眺められ、冬の到来を目前に感じさせられます。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日

１１月の季語・時候の挨拶

向寒、初霜、初冬、立冬、氷雨
落葉、季秋、霜秋、深秋、暮秋
晩秋の候／感傷の秋／日ごと冷気加わり／小春日和の今日この頃／ゆく秋の感慨も深く／菊花薫る季節／冬の足音が聞こえるようなこの寒さ・・・など

「ハレ」と「ケ」
～ふだんの日と特別な日を使い分ける

昔から日本人は、ふだんどおりに日常を送る日を、「ケ（褻）」の日と呼びました。これに対して神社の祭礼や正月や節供、お盆などの年中行事、冠婚祭を行う日を「ハレ（晴れ）」の日として単調になりがちな生活に変化とケジメをつけていました。

「ハレ」のときは、日常から抜け出して特別な日を過ごします。ハレの日用の着物を着たり、神聖な食べ物である赤飯や餅を食べたり、お酒を飲んで祝ったりして、特別な日であることを示しました。

一方、「ケ」はふだんどおりの生活を送る日ですが、「ケ」の生活が順調にいかなくなることを「気枯れ」、つまり「ケガレ」になるとし、とくに死や病、出産などはケガレと考えてきました。

日本では神話期からケガレを忌み嫌い、神様に近づくのにふさわしい体になるために禊（みそぎ）をし、お祓（はら）いをしたりしました。そして、このケガレを取り除いた状態が「ハレ」だったのです。今では、「ハレ」「ケ」という考え方は一般的ではなくなりましたが、ハレの日に着るという意味では、「晴れ着」や「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉が残っています。

安産祈願　１１月の戌（いぬ）の日

１０日（水）
２２日（月）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《 3日　文化の日 》

自由と平和を愛し、文化をすすめる日です。

《 ２３日　勤労感謝の日 》

勤労をたっとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう日です。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう